

古代史を解明する会

第54回

「銅鏡と日本古代史」へのコメント

2025年11月22日
丸地三郎

第389回 邪馬台国の会(2021.7.25 開催) 鏡の歴史にみられる二大激変

安本美典氏の講演

- 鏡の分布中心地域の大激変の法則
- 青銅鏡の歴史において、西暦320～350年ごろに、鏡の分布中心地域が、福岡県など北部九州を中心とする地域から、奈良県など畿内を中心とする地域へと、大変化をするという事実が認められるという「法則」である。以下、略して、「鏡の分布中心地域の大激変が存在するという法則」と呼ぶ。
- わが国の青銅鏡の歴史においては、「鏡の分布中心地域の大激変」が起きるよりも、時期的にまえに、**わが国で出土する鏡に用いられている銅原料が、「中国の華北系の銅原料から、中国の華中・華南系(長江流域系)のものに変化する**という「大激変」が起きている(鉛の同位体比の分析の結果による)。
- 私は、この大激変を、「第1次大激変」とよび、「鏡の分布中心地域の大激変」を、「第Ⅱ次大激変」と呼んでいる。
- 「第Ⅰ次大激変」は、**西暦280年に、中国で呉の国が滅亡し、長江(揚子江)流域産出の銅が、華北の洛陽などに流れこんだことによって生じた現象とみられる。**

鏡の分布中心地域が、福岡県など北部九州を中心とする地域から、奈良県など畿内を中心とする地域へ



図 庄内期の鏡の1例（「雲雷文長宜子孫銘 内行花文鏡」）

直径16.25 cm。広島県北広島町千代田出土（『倭人と鏡』埋蔵文化財研究会刊による）。

州となる。
とすると、鏡の分布から見たばあい、邪馬台国は、
九州にあつたことにならないか？

庄内期の鏡
寺沢薰氏は、庄内期を、ほぼ、
邪馬台国時代にあたるとする。

鏡の地域的分布の中心は、福岡県を中心とする北九

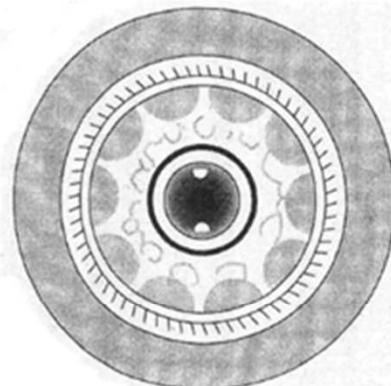


図 「小形仿製鏡第Ⅱ型」の1例

直径7.9 cm。福岡市西区飯氏字馬場出土鏡をもとに作図。もとの拓本写真は、高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」（『季刊邪馬台国』32号、1987年刊所載）による。

●「小形仿製鏡第Ⅱ型」●

大略魏の国（西暦二二〇年～二六五年）のころ、ほぼ邪馬台国の時代に、わが国で作られていたとみられる鏡

この鏡の出土数は、かなり多い。当時、魏の国では、銅原料が不足していた。
鉛同位体比の分析結果をみると、貸泉（銅錢）を大量に溶融すると、「小形仿製鏡第Ⅱ型」の銅のようになるかとみられる。

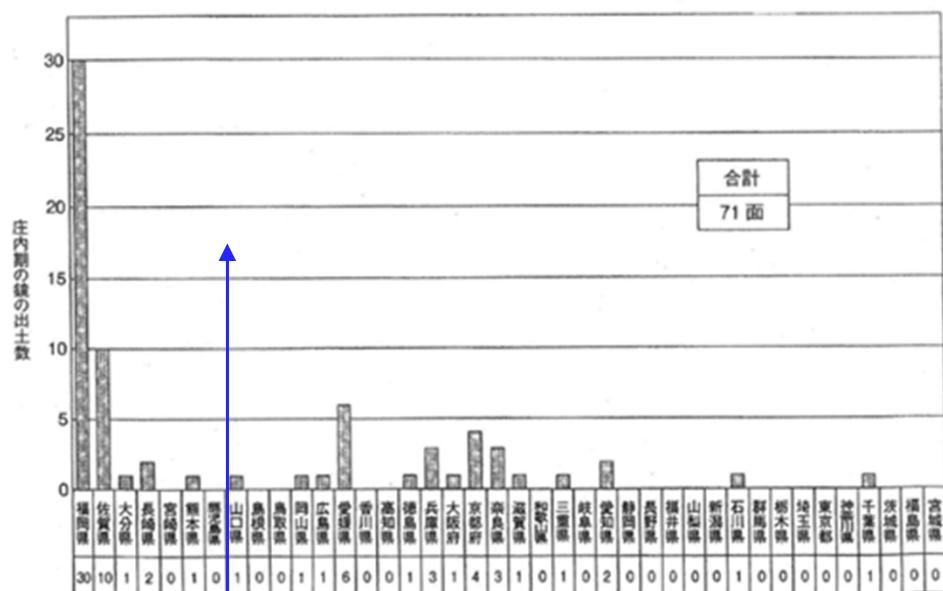


図 寺沢薰氏の資料による県別・庄内期の鏡の出土数

寺沢薰著「弥生時代の年代と交流」（吉川弘文館、2014年刊）の333～336ページ所載の表。

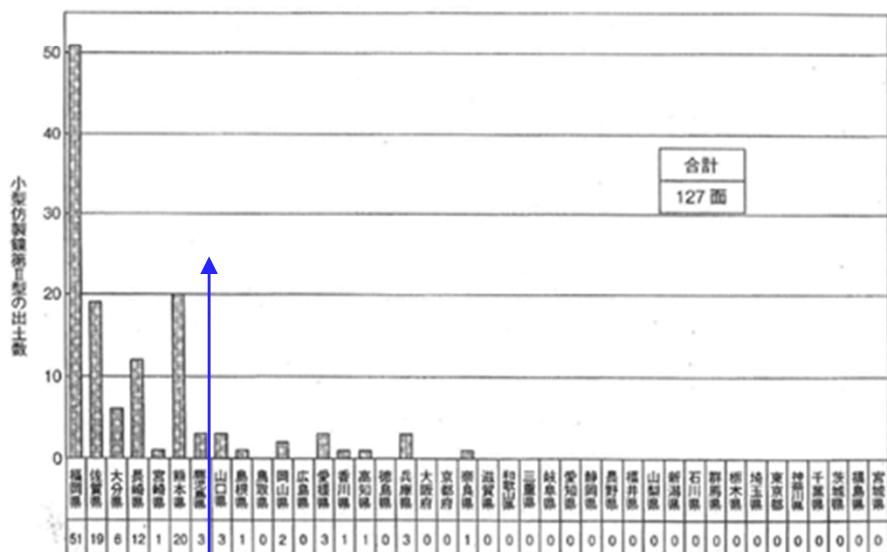
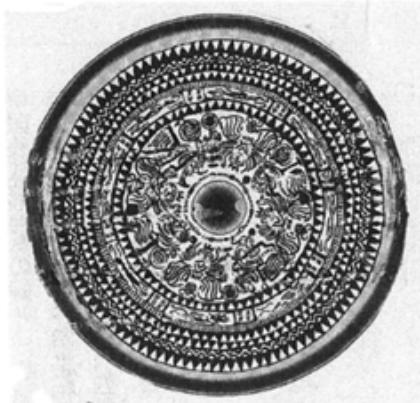


図 県別 小形仿製鏡第Ⅱ型の出土数

もとのデータは、田尻義了著『弥生時代の青銅器生産体制』（九州大学出版会、2012年刊）による。なお、田尻義了「弥生時代小形仿製鏡の集成」[『季刊邪馬台国』106号、2010年刊]参照。

鏡の分布中心地域が、福岡県など北部九州を中心とする地域から、奈良県など畿内を中心とする地域へ ②



図「三角縁神獸鏡」の1例
直径23.2cm。京都府相楽郡山城町椿井大塚山古墳出土の「三角縁神獸帶四神四獸鏡」を描いたもの。

●「三角縁神獸鏡」●

(中国からは一面も出土していない。ただし、文様、鉛同位体比などは、長江流域系のものである。わが国では、「画文帶神獸鏡」よりも、すこし遅れて登場する。おもに四世紀の遺跡から出土している)

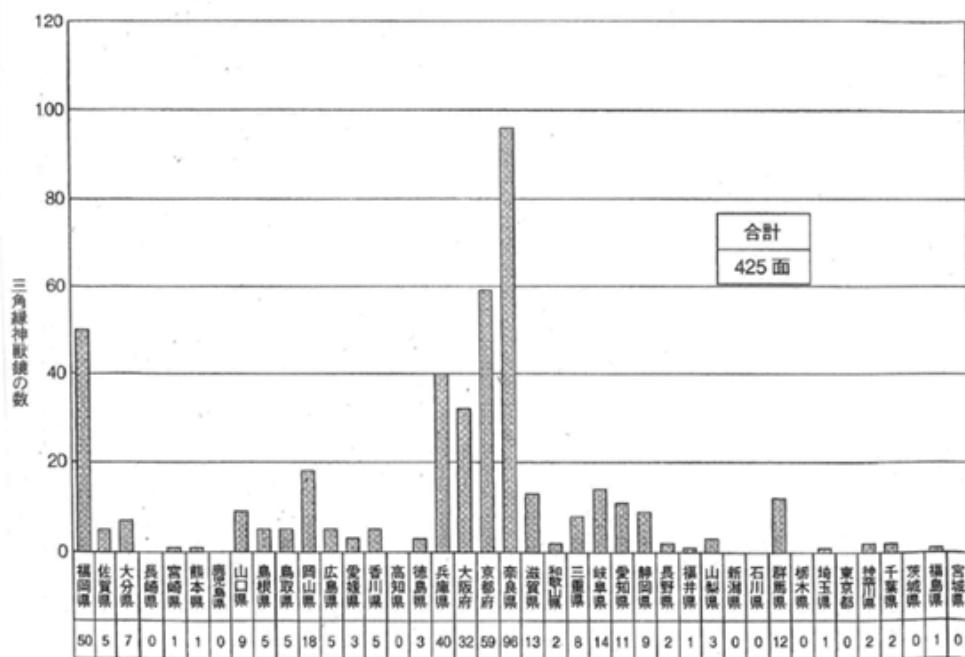


図 都府県別「三角縁神獣鏡」の出土数
もとのデータは、下垣仁志著『三角縁神獣鏡研究事典』〔吉川弘文館、2010年刊〕による。ただし、「伝」「推定」などとあり、出土地が不確かなものをぞく。

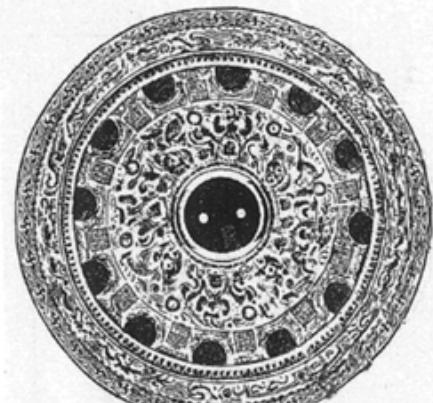


図 「画文帶神獸鏡」の1例
直径10.3cm。図は、川西宏幸著『同型鏡とワカタケル』(同成社、2004年刊)にもとづいて作成。

中国長江流域系の鏡
(わが国出土のものは、四世紀前半あるいは
中後から登場し、おもに、四世紀の遺跡か
ら出土している)

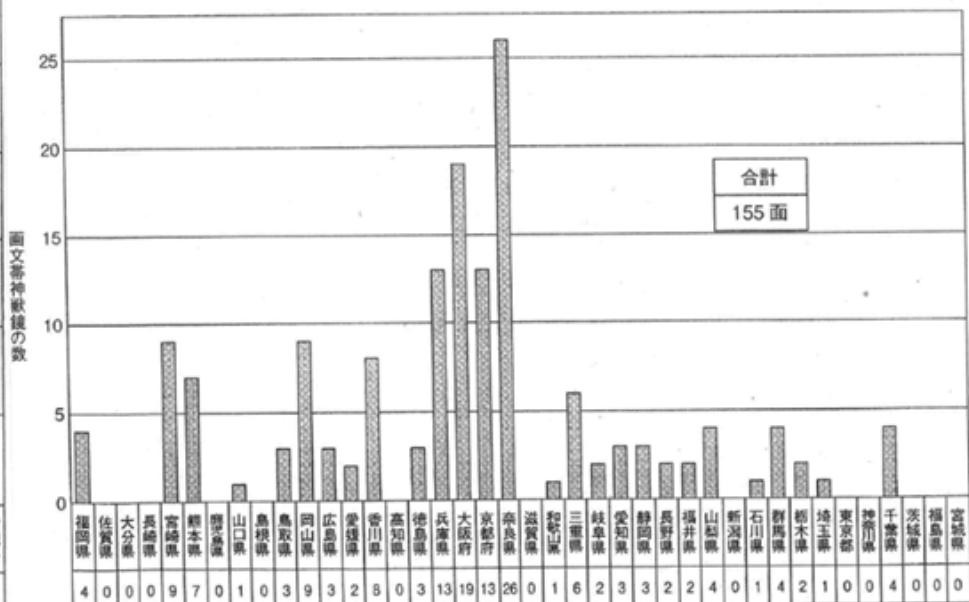


図 都府県別「画文帶神獸鏡」の出土数
もとの出土データは、拙著「大崩壞「邪馬台国畿内説」」〔勉誠出版、2012年刊〕に示したデータによる。

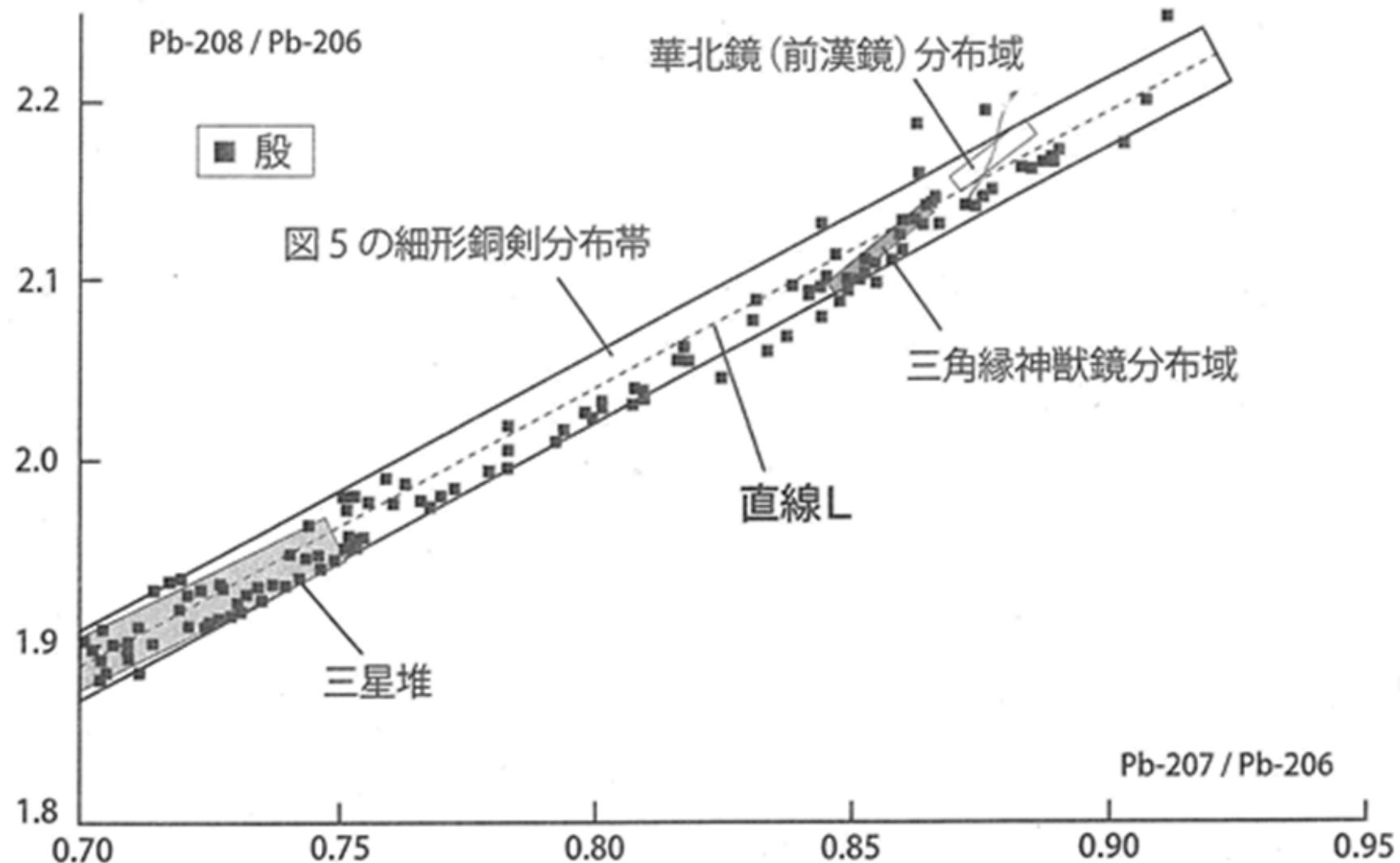


図 殷代の青銅資料が分布する鉛同位体比領域
東京国立博物館編集・発行『中国北方系青銅器』(2005年刊) 所載の図に
もとづき作図

日本の鏡

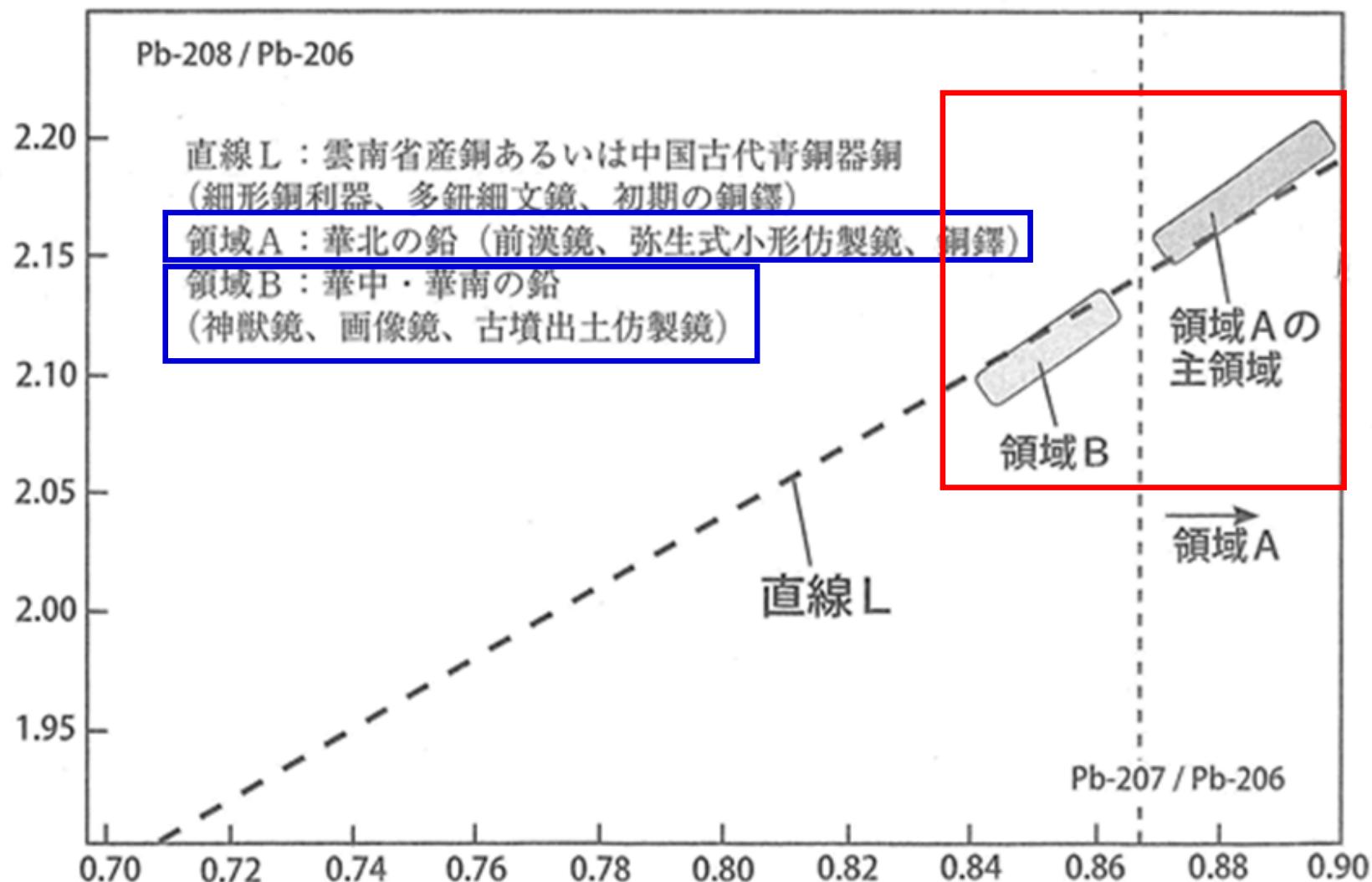


図4 日本出土青銅器の鉛同位体比分布

鏡 2種類の原材料

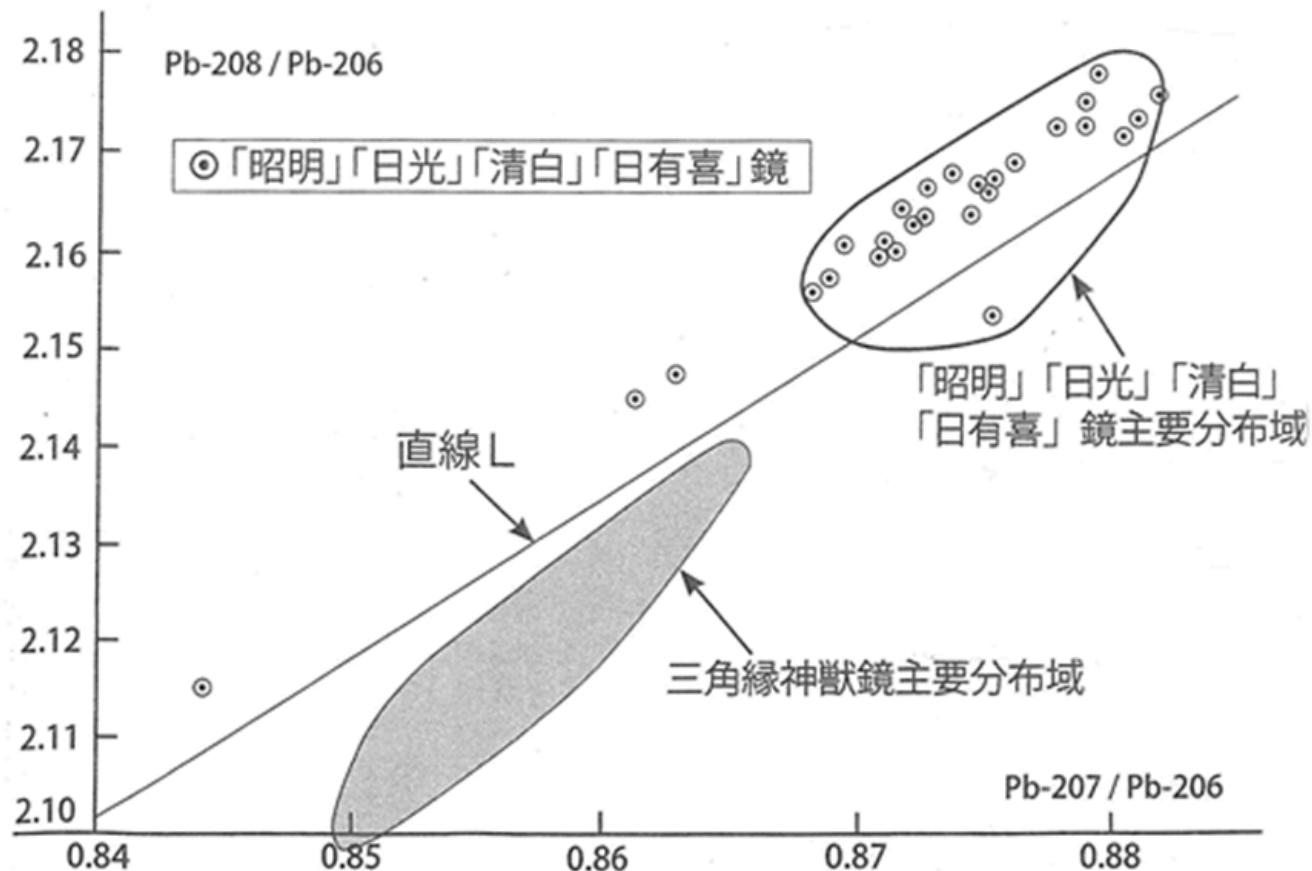


図 「昭明」「日光」「清白」「日有喜」鏡の鉛同位体比

- 「領域A」に分布するもの **甕棺から出土する前漢・後漢式鏡**（「昭明」「日光」「清白」「日有喜」）、箱式石棺から出土する「長宜子孫」銘内行花文鏡、小形仿製鏡第Ⅱ型、そして、広形銅矛、広形銅戈、近畿式・三遠式銅鐸などは、「領域A」に分布する。弥生時代の国産青銅器の多くも、この領域にはいる。
- 「領域B」に分布するもの 三角縁神獸鏡をはじめ、古墳から出土する青銅鏡の大部分は「領域B」にはいる。ほぼ、西暦300年ごろから400年ごろに築造されたとみられる前方後円墳から出土する鏡の多くは、この領域にはいる。

鏡 2種類の原材料

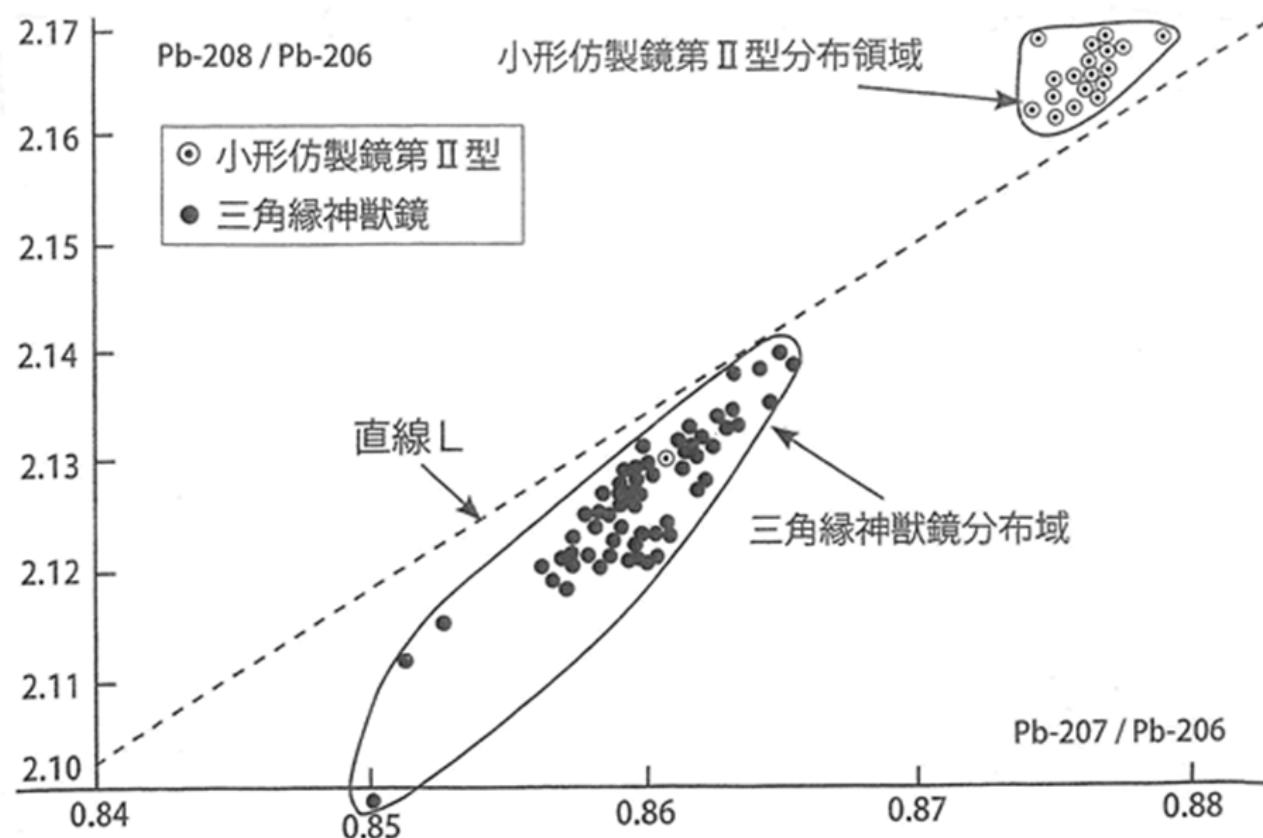


図35 小形仿製鏡第Ⅱ型と三角縁神獸鏡(2)（図34の右上部分の拡大図）

- 「領域B」に分布するもの 三角縁神獸鏡をはじめ、古墳から出土する青銅鏡の大部分は「領域B」にはいる。ほぼ、西暦300年ごろから400年ごろに築造されたとみられる前方後円墳から出土する鏡の多くは、この領域にはいる。
 - 画文帶神獸鏡の鉛同位体比は三角縁神獸鏡と同じ分布の範囲となる。
 - 画文帶神獸鏡も三角縁神獸鏡も古墳時代であり、同じ原材料となる。

280年に呉が滅ぶので、中国の南方の銅が入って来る

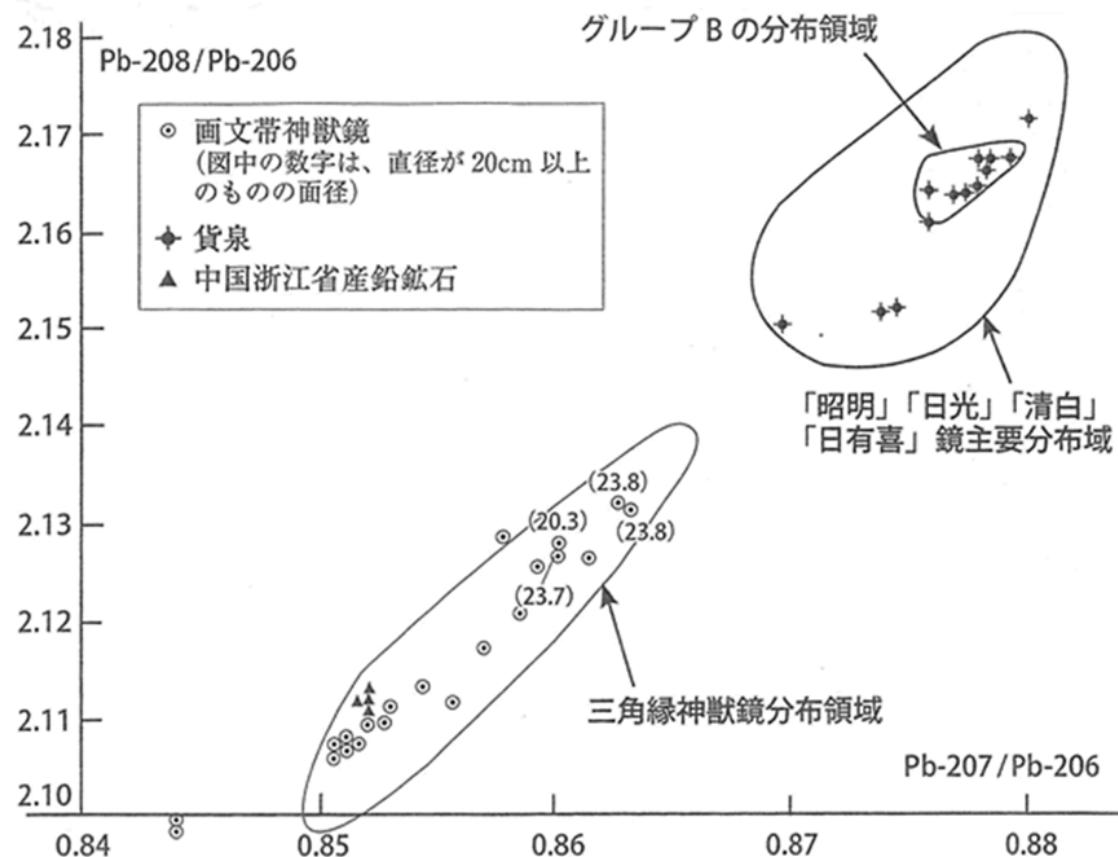
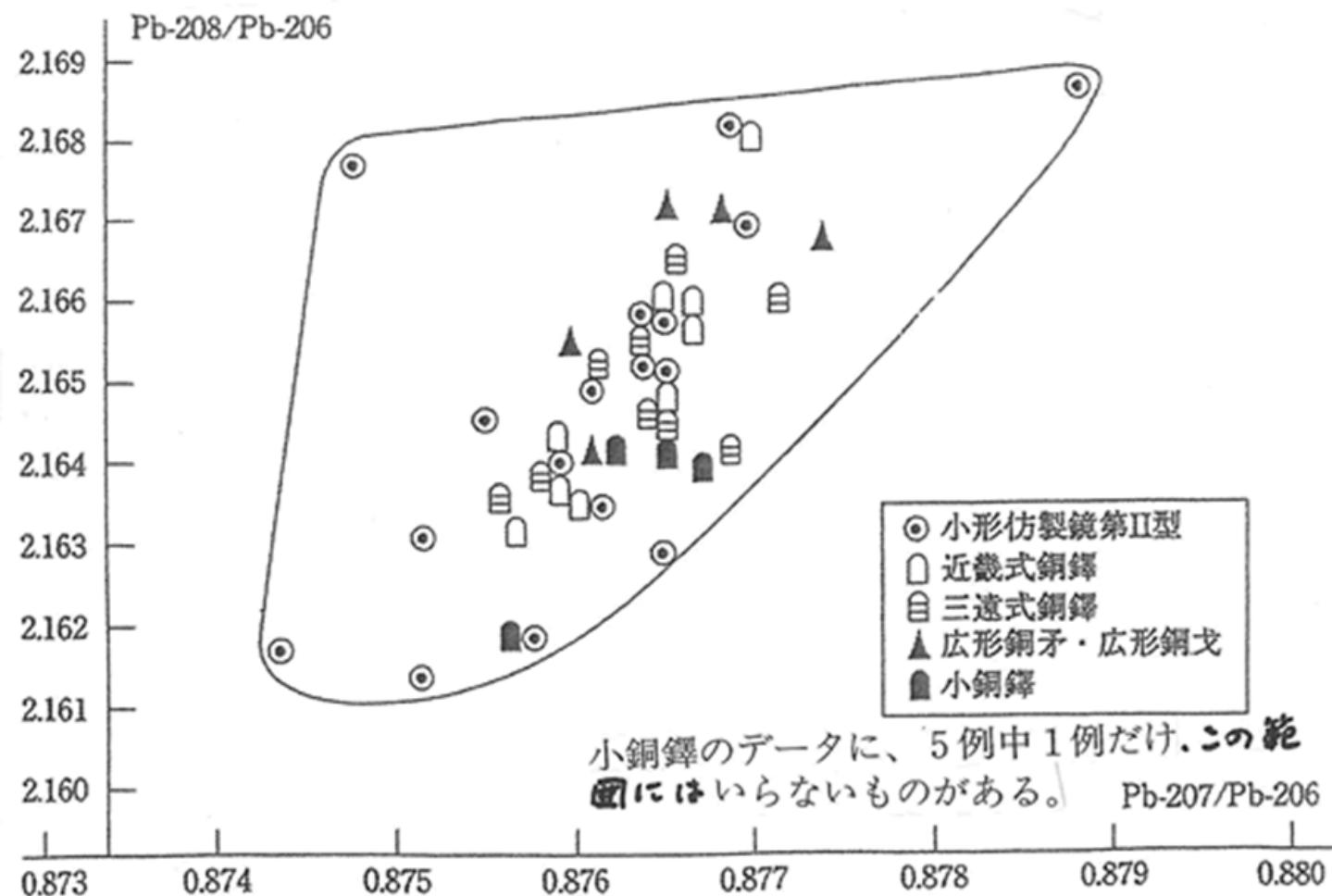


図 「画文帶神獸鏡」の鉛同位体比

- 北九州から中心に出土する西晋時代のいわゆる「魏晋鏡」の鉛同位体比について、位至三公鏡、双頭竜鳳文鏡、蝙蝠鈕座内行花文鏡、變鳳(きほう)鏡のいわゆる「魏晋鏡」は三角縁神獸鏡と同じ分布となる。
- いわゆる「魏晋鏡」は北九州から出てくるが、三角縁神獸鏡と同じとなる。
- これは、中国の北の方の国であった魏では銅が枯渇していたが、280年に呉が滅ぶので、中国の南方の銅が入って来るようにになる。そのため「魏晋鏡」に中国南方の銅(上図の浙江省産鉛鉱石を参照)が使われたと考えられる。
- いわゆる「魏晋鏡」と画文帶神獸鏡は左下に少しあり出る。

弥生時代の青銅器は、前漢鏡同じ原材料



- 拡大図でグループBの狭い領域の小形仿製鏡Ⅱ型、広型銅矛・戈、近畿・三遠式銅鐸、小銅鐸の鉛同位体比の分布を見る。

まとめ

- 魏では銅が枯渇していたが、晋の時代の西暦280年に呉が滅ぶので、中国の南方の銅が入って来るようになる。
- 鉛鉛同位体比で分析すると、二つに分離できる。
 - 西暦280年以前の原材料はBグループ
 - 西暦280年以降の原材料はAグループ
- 卑弥呼までの時代の鏡は、漢鏡と同一原料(Bグループ)に属す。
- 三角縁神獸鏡は、西暦280年以降の原料(Aグループ)に属し、卑弥呼の時代の鏡ではない。
 - 科学的な鉛鉛同位体比分析の結果を無視する考古学者が居ることは残念。